
子猫のワルツ

宗像竜子

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

子猫のワルツ

【Nコード】

N6285M

【作者名】

宗像竜子

【あらすじ】

あたしの名前はケイト。ぴっちぴちの女の子…なんだけど？

ケイトは自分を拾ってくれたハザマと二人暮らし。

ケイトの恋心は果たして彼に届くのか？

『妖幻抄』と同じ世界を舞台にした、宗像の作品としては珍しい、一生懸命に恋する女の子の物語です。

子猫のワルツ（前篇）

あたしの名前はケイト。ぴっちぴちの女の子。
毎日身綺麗にしてるの。大好きな、あの人の為に。

+ + +

「おはよう、ケイト」

寝ぼけ眼で、ハザマが毎朝の挨拶をくれる。

朝が弱いハザマを起こしてあげるのは、あたしの大切なお仕事。
毎朝欠かさず彼を起こし、彼の膝の上に乗って、朝の一番のキスを
してあげる。

「おはよ、ハザマ。今日もいい天気だよ」

切り取ったように窓から見える空は、最近じゃ珍しい程に綺麗な
青空。

ハザマはまだ半分夢の中にいるような顔であたしを見つめて、ち
よつと荒れた大きな手であたしの頭を撫でてくれるの。

これがあたしの朝の幸せ。

朝御飯を食べるよりも、ハザマに頭を撫でてもらう方がずっと好
きな。多分、ハザマは知らないだろうけど。

+ + +

ハザマとどうやって出会ったのか、それは残念ながらよく覚えて
いない。

気がついたら、あたしはぶるぶる震えながら、ハザマにしがみつ
いていた。

視界に入ったハザマの手にはいくつもいくつも引っ掻き傷があっ
て
あれは多分、あたしが無意識にやった事に違いない。

でも、その大きな手が優しく頭とか背中を撫でてくれたのが本当に嬉しかったから、あたしはその傷について謝る事も忘れて、伝わってくる暖かさを手放すまいと必死だった。

そうして連れて行かれたのがハザマのおうちで。

気がつくと、ハザマとあたしの生活はいつの間にか始まっていたのだった。

二日ばかり、ハザマはあたしを『チビすけ』とか『チビ』とか、ともかく失礼な名前前で呼んでいたのだけど、何がきっかけだったのか、いきなり『お前の名前はケイトだ』って真顔で言って、それ以来ずっとあたしの名前は『ケイト』だ。

ハザマは一日の半分はおうちで、半分はお仕事に出かける。あたしはずっとここで留守番。

外に出たいと思わないわけではないけれど、ハザマのおうちはそれなりに広いし、日当たりも悪くないから、まあ我慢は出来る。

でも、最近　離れている事がすごく苦痛になってきたの。

あたしはハザマが好きだし、ずっと一緒にいたいけど、ハザマの方はきつとあたしをそういう対象には見てないんだろうし…多分、あたしの気持ちも気付いてない。

ハザマは黒い髪に黒い瞳の、すごく無愛想な顔をしてる。にこりもしない。

お仕事も何をやっているのか、あたしは知らない。なんで、こんな男が好きなんだろうとか思うけど、好きなんだからしょうがない。

離れたくないけど、必ずここに帰ってきてくれるからいい。

淋しいけど、ここに居る時は一緒にいられるから。

…なのに。

ある日、ハザマに電話がかかってきた。

もちろん、相手が何を言っているのか、あたしにはよくわからなかったけど、ハザマの口調から偉い人らしい事だけはわかった。

「…三日間、ですか」

少し固い声音で、ハザマが言う。

「…はあ、まあそれは仕方がないと思いますが…」

「え？ 明後日から？ …わかりました。 …じゃあ、当日に

「はい、資料は明日までには揃うでしょう。 それでは」

電話を切ってから、ハザマは困ったような顔であたしを見た。そして唸るように漏らす。

「…三日も放っておいて、大丈夫かな……」

その言葉にあたしは本当にびっくりして、文字通り飛び上がった。ハザマはほとんど無意識に口にした言葉みただけど、内容が内容なだけにあたしの耳にははっきり聞こえた。

ハザマは、三日もいなくなるつもりだ。あたしを一人ここに残して！

ひどい、ひどすぎる！！ 一日なら我慢出来ても、三日間も会えずにいるなんて絶対に出来ないよ！！

「ダメ！ 行っちゃダメ！！」

力一杯抗議してしがみつくと、ハザマは困ったように頭を掻く。

「参ったな…でも行かないといけないし……。 と言って、誰かに預ける訳にもいかないか……」

もちろん！ そんな事したら許さないんだから！！

相手の顔、引っ掻いてやる！ 男でも女でも関係ないよ！！

「…三日分の食い物は用意しとけるし……。 何とか、なるか？」

まるで物問うようにハザマの視線が向けられる。

なる訳ないでしょっ！！！！

「行かないでよハザマ」

思い切り甘えた口調で言ってみるのに、ハザマには効果なし。まるで埋め合わせみたいに頭を撫でてくれたりして。

腹が立つ！

…なのに、こうされると我がまま言えなくなっちゃうんだよね…

…。これがいわゆる惚れた弱みってやつかも……。

結局、そうこうする内にハザマは仕事の為に三日も帰ってこない事になってしまった。

+ + +

「じゃあ、いい子で留守番してるんだぞ」

寝坊でも何でもすればいいんだわ！ ……とか思っていたのに、習慣って恐ろしい……。

気がついたらいつものように起こしちゃってた。

玄関先で、ハザマは珍しくスーツ姿。意外と似合う。いつもとは言わないけど、たまにはこういうのもいいな。

なんて、見とれている場合じゃないっ！！

これじゃ、本当に置いていかれちゃうよ！

そう ……こうなったら着いて行くまで！！ ……とここ数日心に秘め、機会を狙っていたのにどうしても実行に移せなかったんだ。

…だって、それが元で嫌われちゃったら嫌だもの。

放り出すような人じゃないけど、嫌われて、今までたまに笑ってくれたりもしてたのにそれすらもなくなるなんて辛いもの。

ハザマは滅多に笑わないけど、笑うととても優しい笑顔になるのよ…外でのハザマがどうか知らないけれど、これはあかしだけの特別だと信じたい。だから、なくしたくないの。

置いていかれるのは嫌だけど、嫌われるのはもっと嫌。

そう思ってしまったら ……動けなくなっちゃって。

「それじゃ行ってくるから」

ハザマがそう言って、いつも通りに乱暴にあたしの頭を撫でて玄関のドアを出て行くのを、結局引きとめる事も出来ないまま見送ってしまった。

ばたん、とドアが閉まってしまうと、不意に後悔が押し寄せてきた。

あたしだって、わかってる。ハザマが遊びに行ってる訳じゃないって事は。

お仕事が生活する上で大事なんだって事も、少しくらいはわかっ

てるもの（ハザマが何をしてるのかは知らないけれど）。

でも、行って欲しくなかった。置いて行かれたくなかった。

だって　　いつもハザマは帰ってきてくれるけれど、今度も……うっん、今までだって絶対の保証はなかったんだもの。

外は色んな危険なもので一杯。車とか、ちよつとした弾みで命を奪うものが溢れてる。

今度は三日もないのに、あたしの知らない所でハザマが無事でいてくれるかどうかなんてわからないじゃない……！

ひよつとしたら……知らない内に死んじやったり……したら……。

オトウサントカ、オカアサンミタイニ。

駄目だ……！

やっぱり着いて行く……！　嫌われてもいい、ハザマが生きて元気でいるならいいよ。そりゃあ、辛いけど。でも、今は離れたくないんだもの……！

思った時には体が勝手に動いていた。

子猫のワルツ（後篇）

小走りにこの部屋で唯一直接外に繋がる場所　ベランダへと走る。

この鍵はいつも開けてあるから、ラクに出られた。そして手すりによじ登って下を見る。

……。

知らなかった。ここってこんなに高かったのね……。

吹き上げてくる風が冷たい。風を透かして地上は遥か下に見えた。しばらく見ていると玄關らしき場所から小さな人影。

ハザマだ!!

「ハザマーっ!!!!」

力の限り叫んだ。でも風が強くて、彼には届かない。

「ハザマっ！　待ってよーっ!!!!」

もう一度。今度は届いたのか、ハザマが立ち止まる。そして首を捻っているのがわかった。

まさか、な。

何だかそう言っているような感じで、彼はそのまままた歩き出す。ちょ、ちよっと待ってよ。普通、そこまで思ったらこっちを見たらしい？

…あ、でもハザマはすぐく目が悪いんだっけ……。だからって、ここで諦めてたまるか!!

「ハゝザゝマアゝゝッ!!」

体全体で叫ぶ。不意に何とも言えない違和感が体を襲ったけれど、そんな事には構ってられない。

ハザマの歩みが止まった。そのままゆっくりとこちらに顔を向けて……。

「ハザマ!!」

やった! 届いた!!

そう、思った瞬間。

「きゃあっ!?!」

いきなり近くで悲鳴が上がった。聞き覚えのない、女の人声だ。何だ? と思ってそちらを見ると、隣の部屋のベランダに女の人が出っ立っていた。ちよつと小太りな、中年に差し掛かった辺りの。

なんて事を思っていたら、その女の方は今にも卒倒しそうな声で言った。

「ちよ、ちよちよちよ、ちよつとあなた!?! ダメ、駄目よ、若い身空で早まっちゃっ!!」

「……はあ?」

「い、いいい、いい!?! お、落ち着いて、落ち着くのよ?」

落ち着くのはどう見ても彼女の方だと思う……。

それより、ハザマは!?!

慌てて目を戻す 地上で彼がこちらを見上げているのがわかった。

……あれ? でも何か、様子が、変……?!

その、刹那。

不意に強風が吹き上げ、反射的に顔を庇^{かば}った時。

何かが違う。そう思った。でも、それが何かわからない内に、あたしの体はバランスを崩してそのまま。

「き、きゃあああああ~~~~っ!!!!」

女の方が自分が落ちたみたいない悲鳴を上げる。落ちてるのはこっちだってばっ!!

…じゃなくて、落ちてる、落ちてるようっ!?

「…ケイトツ!？」

ハザマが血相変えてるのを初めて見たかも。

ああ、でもあたしこれで死ぬのかなあ。そうしたらハザマ、少しは悲しんでくれる……？

そうして、世界は不意にブラックアウトした。

+ + +

「…ええ、十階のベランダから落ちて……」

「あらまあ、それは強運な子ですねえ」

「…まあ、助かってほっとしました」

遠い所でハザマの声がする。それと、知らない女の人。

…おんなあ!？ ちよつとハザマ？ その人誰っ!？

「そう言えば、さっき警察の人が『人が落ちた』とか言っていましたけど?」

「ああ、お隣の奥さんでしょう。すごい興奮状態で、多分動転してそんな事を……」

「あら、でも…女の子と猫ちゃんを間違っなんて」

「見間違いです。あなたも診たように、この子は ケイトは猫ですよ」

……。

なんか、ハザマ、怒ってるような気がする。…やっぱりあたし、嫌われちゃったのかなあ……。

何だか泣きたい気持ちでいると、女の人のため息を一つついて部屋を出て行ったようだった。

ゆっくりと目を開けると、やっぱり知らない場所だ。匂いが違ってたからそうだと思ったけど。

「起きたか? ケイト」

ハザマがいつもの不機嫌そうな声であたしを呼んだ。呼んで

くれた。

「…うん。あの、ハザマ…怒ってる？」

そつと声のした方に顔を向けると、ハザマは疲れたように笑った。

「つたく…、寿命が縮んだぞ」

ごめんなさい。

謝る前に、目が潤んだ。目が覚めてそうして　もし、そこにハザマがいなかったら。そんな事を思ったらすごく怖かったから。大きな手がそつと頭を撫でてくれる。あつたかい手。すごくほつとする。

「まだショックから抜けきってないんだ。寝とけ。…わかるな？」
諭すような言葉がなくても、あたしは半分夢心地だった。ハザマに嫌われてない。それだけですごく安心できたから。

もう一度目を閉じる。

大好きだよ、ハザマ。

世界で一番好きだから……。だからお願い。ずっと側にいてね……。

+ + +

「…さて、どうしたものかな」

ハザマはすっかり安心しきって眠りについた子猫を見下ろした。

純白の毛。今は閉じられた瞳は琥珀。

子猫と言っても生後半年以上は経っている。半分は大人　人間なら少女くらいだろう。

（まだまだ子供だと思っていたんだが）

彼は苦笑する。そしてそつと子猫の頭を撫でる。慈しむように。愛しむように……。

「いつかはこういう日が来るとは思ってはいたが……」
脳裏に甦ったのは、落下してきた『彼女』の姿。

この腕に落ちてきた時には、もう元の姿に戻っていたけれど、確かにあの時、この子猫は人の姿をしていたのだ。

隣家の婦人は決して見間違っではない。かと言って、事実を明らかにする訳にはいかないのだけど。

(…引越すか)

結論はすぐに出た。

確かに、最近住み慣れてきたと思った部屋を去るのはもったいない気もしないでもないが、この手の噂はすぐに尾ひれがついて広まるものだ。

先程の女医がやけに絡んできたのも、おそらく猫が人の姿になったとは思わずとも、ケイトが猫の姿をしていても実際の猫とは違うと感じたからに違いない。

恐怖や好奇の目　そんなものに彼女を晒すつもりは毛頭ない。
「…やっと見つけた同類だから……」

ぼそりと呟いた彼の瞳が一瞬だけ金色に輝く。瞳孔が盾に裂けたそれは、正に猫の　。

+ + +

あたしの名前はケイト。ぴっちぴちの女の子。
いつも身綺麗にしてるの。

大好きな　この世でただ一人、大事な彼の為に……。

子猫のワルツ（後篇）（後書き）

こちらの作品もキリリクで書いたものになります。リクエストは『半獣人もので！』という事だったのですが。

出てきたのが『猫又』か『猫娘』だったのには別に他意はありません。

何で妖怪？と自分でも思いはするのですが、まあ、天の邪鬼ですの
で……。

本当はもっとう、ファンタジーなものにしようと思ってプロット
まで立てたんですがね（だって猫耳といえばファンタジーでしょ
う！？ 猫以外書く気なし）

何だか食指が動かなかったんです……。

結果として、なんと言うかめちゃくちゃおとめちつくな少女マンガ
状態の話になったのですが、不思議とケイトは書いていてストレス
にならない子でした。

結果としてHPIイベントで続編を書く事に。ある意味、苦手な一人
称が平気になったのはこの子のお陰かも（笑）

子猫のワルツ　～その後～

あたしの名前はケイト。

ぴっちぴちの女の子…でした。

でした、って過去形使うのはちょっと変かな？　別におばさんになつた訳ではないんだし。

「…ケイト？　どうしたんだ、鏡なんか見て」

呆れたように、ハザマが言う。

ハザマはあたしの大好きな人。

ひとりぼっちになつたあたしを拾って、名前をつけて、育ててくれた。多分、命の恩人。

相変らず無愛想で、滅多に笑顔なんて見せてくれないし、かなり鈍感。あたしの気持ちなんてわかるうともしてくれない。

「今更めかし込んでも一緒だろう？」

むかつ！

いくらなんでもその言い方ってある？

そりゃ、向こうは本当に子供だった頃からあたしを見てるし、毎日顔を合わせているから、ちよつとオシヤレした所で気付かないって事も…あるのかも…しれない、けど。

だからって女の子の必死の努力を無駄にするような事言わなくてもいいと思う！！

…でも惚れた弱みか、怒りは持続しない。

いつだって、あたしが折れる。白旗掲げて、ハザマを許してしまふ。

だって、ハザマはどうか知らないけれど、あたしには物心ついた時からハザマしかいなかったんだもん。

少し前、ハザマからも言われた。

あたしは庇護してくれる誰かが欲しいだけだろうって。違ふのに。

多分、拾ってくれたのがハザマじゃなかったら、きっと違う展開になっていたと思うよ。断言できる。

その時もそう言ったっけ。

あの時は本当に、死ぬ程泣いた。泣きながら訴えた。

たとえ　　ハザマとあたしの生きる世界が違うのだとしても、

あたしはハザマ以外を好きにはならない。

恩を感じて、とか、守ってくれる何かが欲しくて、ハザマと一緒にいるわけじゃない。

その時のハザマのうろたえ方は、多分一生忘れないと思う。

「おい、ケイト……」

うんざりしたようにハザマが急かす。

いいじゃない、もうちょっとくらい。少しでも綺麗になりたいよ。だって、今日は特別な日だもの。

「…置いていくぞ」

「待った！　出来た、出来たからっ！！」

すでに玄関に移動したらしいハザマのぼそりとした言葉に、慌てて答える。

ハザマには冗談も言い訳も通じない。本気で置いていくと言われてしまったら、どんなに泣き落としても置いていかれるに違いない。

本当に冗談じゃない！

今日は…今日は初めてハザマとデートするのにっ！！！！

あたしが泣いて訴えたその日。

ハザマはあたしに、大きな秘密を覚えてくれた。

ハザマもあたしと同じ…人間じゃないんだって事。本質的には人に限りなく近いけど、純粋な『人』ではないって事。

あたしは人間と猫の姿を持つ生き物。本当の所の呼び名はよくわからないけれど、少なくとも普通の人間じゃない。

ずっと…ハザマは人間で、この好きな気持ちは実を結ぶ事はないだろうって、心ひそかに思っていたけれど。

でも、違った。

ハザマが本来（猫の方が元々の姿にあたるらしい）の姿になった事はないけれど、ハザマはあたしと同類。

それだけでも、どんなに嬉しかったか。

だから今は猛アタック中。ハザマは本当に鈍感なのか、それともわかっていてはぐらかしているのか、まともに取り合ってくれないけど。

でも、あたしがうまく人間の姿になれるようになったら、一緒に出かけてくれるって言ってくれた。それまで、あたしはずっとハザマの部屋からほとんど出た事なかったから。

今日はその記念すべき初デートの日なのだ。

…向こうはそうは思っていないだろうけど。明らかに『保護者』って顔してるし。そのくらいの夢は見てもバチは当たらないよ、ね？
ハザマが買ってきてくれたワンピースを着て、ハザマの待つ玄関へと急ぐ。

ハザマはやっと来たかと言わんばかりの表情であたしを見る。

「遅い」

「ごめんなさい！　ね、ねえ、変じゃ、ない……？」

人間の服の着方は初めはよくわかんなくて、ハザマにさんざんばかにされた記憶が甦る。

だって…ファスナー、だっけ？　あれ背中にあるんだよ！？　どうして見えないのに締める事が出来るのか、あたしには不思議でしようがない。

人間って…背中に目でもあるのか？　とも思っただくらい。

今日のこの日の為に、あたしはいろんなテレビとか雑誌を見て着方を勉強したんだ。昼間はハザマは仕事でいないから、練習する時間だけはたっぷりあったし。

だから…多分、大丈夫。そうは思っただけど……。

ハザマはじつとあたしを何の感慨もなさそうに見つめた。

「…やっぱり、なんか変なのか、な……？」

黙りこまれると余計に悪い方へと考えてしまう。せめて一言、言ってくれればいいのに。

すると。

「いや。…似合ってる」

……………！？

「え、い、今…何て!？」

噛み付くように問い返すと、ハザマは心底うんざりした顔でもう一度言ってくれた。

「似合ってる。…ほら、行くぞ」

「う、うんっ」

ハザマの普段の言動にしてみたら、最上級の部類に入る褒め言葉を貰って、一気にあたしの気分は急上昇する。

まだまだ子供扱いだけど、今に見てる！ きっとハザマがびっくりするくらいの、いい女になってやるんだから!!

あたしの名前はケイト。

この間まではぴっぴちの女の子。

そして今は…恋する乙女

子猫のワルツ　　その後（後書き）

「子猫のワルツ」の後日談です。

ケイトが自分の事をいくらかなりと理解した辺りの話。

実は、ここまで甘々スウィートな話（当社比）をまともに書いたのは「子猫のワルツ」が初めてでした。

宗像、中身がアニキらしいので乙女心をうまく表現出来そうになくて。

でもこの話で、女の子一人称ってのも悪くないなーと思い始めました。

それまでは女の子一人称の小説自体、どこか苦手だったのですが、読む分にも抵抗がなくなったというか。

他の作品に比べるとかなり毛色が異なりますが、そういう意味ではこのシリーズは記念碑的な扱いです（笑）

White Honey (前篇) (前書き)

バレンタイン/ホワイトデーイベント作品 (ケイトver.)

White Honey (前篇)

あたしの名前はケイト。

ぴっちぴちの女の子　…　と言いたい所だけど、この『子』という響きに少し抵抗を感じつつあるお年頃。

もう大分人の姿を保つのに慣れてきて、数日くらいならそのままでいられるようになった。…それなりに疲れてしまうけどね。

一緒に暮らしている同族にして保護者（あたしはそう思っていないんだけど）のハザマみたいに、四六時中人の姿でいられる訳ではないけれど…これでも成長したって、言えるよね？

…にも拘らず。

ハザマのあたしの扱いは、相変わらずの子ども扱い。

たまに一緒に外へ出かける事があるんだけど、こっちはデート気分でウキウキドキドキしてるって言うのに、二言目には『それするな』『あれするな』『お前にはまだ早い』ばかり。

そりゃさ、本当に子供だった頃からあたしの事を見ている訳だから、心配が先に立ってしまうのはわからないでもないけれど。

でも…ちよつと位、意識してくれたっていいのにな。

あたしって、そんなに女の魅力が乏しいの！？　って、思っちゃうよ。

外の世界には。

テレビとか見ていてわかってるつもりでいたけれど、思っていた以上に人と物が溢れていて。…綺麗な女の人、たくさん、いてハザマと二人で歩いていても、どうしても考えてしまう。

あたしとハザマ、一緒に居て釣り合ってるの？

周りの人達に、あたし達はどう見えてるの？

…あたしが時折口にする『大好き』って言葉、ハザマはどう受け止めているの？

不安になる。でも、はつきりと確かめるのは怖くて……。
ねえ、ハザマ。

ハザマはあたしの事…どう思っているの……？

+ + +

2月14日、バレンタインデー。

女の子が好きな人にチョコレートを上げる日…なんだって。

何でそんなのあげるんだろ？ あたしなら貰う方がいいのになあ。
チョコ、好きだし。

人間の風習って、時々よくわからない。でもこれって、人間でも好きな人に『好き』という気持ちを伝えるのが難しいって事なのかも。結局は切っ掛けって事だね？

あたしはハザマに拾われてから二年とちょっとしか経ってないし、バレンタインデーなんてものを知ったのも最近なので、ハザマにチョコレートをあげた事はない。

…第一、ハザマは甘い物はあまり好きじゃないし。
でもテレビを見ている内に、そこで話す女の子達の楽しそうな顔に釣れられて、あたしもそういうのをしたくなった。

そうだよ、よく考えたらハザマにプレゼント自体、あげた事ないよ！

チョコじゃなくても…何か別のものでもいいよね。だってあたし、まだ一人で買える物が出ないんだもの。

心配性のハザマは、未だにあたし一人の外出を許可してくれない。この辺り、本当に子供扱いだよな！

あたしは軽く伸びをして 今は一きりだから、楽な猫の姿

なのだ 寝そべっていたクッションから身を起こした。

さて、どうしよう？

取り合えず、何となく台所に行ってみる。ご飯を作る所。几帳面

なハザマが管理してるから、いつも綺麗でピカピカ。

…チョコ以外、と言っても…じゃあ他にと言われると考えちゃうなあ……。

あたしは料理も自慢じゃないけどろくに出来ない。危なっかしいという理由で、ハザマがいる時じゃないと包丁も持たせて貰えないし。コンロの火、ちょっと怖いし。

しばらく考えてみたけれど、どう考えても台所で何かを作るのはあたしには無理っばい。

むしろ、言いつけを破って下手に手を出したら台所がすごい事になって…ハザマに怒られる、絶対。

そんな想像は簡単に出来るから少し悲しい。仕方なくすごすことまたリビングに戻ると、つけっぱなしだったテレビに映っている番組が変わっていた。

にぎやかなお昼のバラエティ番組。スピーカーから零れる笑い声は和やかだ。

困ったなあ…本当にどうしよう。

悩めるあたしとは対照的に、脳天気な番組は進む。

取り合えずチャンネルを変えるかと、テーブルの上に置いてあるリモコンの所に向かう。とてもじゃないけど、今笑う気分じゃないし。

…その時だ。

《今日はバレンタインデーだけど、チョコはあげるの?》

そんな司会者の声が耳に入った。

《あ、あげますよー。と言っても、義理ばかりですけどねっ》

あはは、と明るく笑って答えるのは、何処かで見たような顔の女の子。今日のゲストは彼女らしい。

何となくそのやり取りが気になって、また画面に目を向けた。

《義理？ またまた…本命もいるんでしょ？》

《え、いませんよ。そんなのー！》

…義理？ 本命？

何かまた知らない事を言ってる。ナニソレ？？

《怪しいなあ…》

《本当ですってば！ …でも本命いたら、すごく力入れると思いますねー。義理がチロルチョコなら、本命は高級店のチョコとか！》

その発言と同時にどつと受けるスタジオ。…今の何処が笑い所だったんだろ？

正直言つて、司会者とゲストの会話はちょっと意味不明。でも何となくわかったのは、どうやら『本命』って言うのは、一番好きな人の事らしい、ってこと。

確かに一番好きな人は特別だね、って思えたから、あたしはチヤンネルを変えるのをやめてそのまま番組を見る事にした。

《手作りとかしないんだ？》

司会者が笑いながらゲストに質問する。

《わたし、不器用なんですよー。逆に嫌われます、そんなのあげたら》

またどつと笑い声。それを聞いたあたしは更に落ち込む。

だってゲストの人の事、あたし笑えないもん！！

…やっぱり、何か作るというのは諦めよう。何を作るかも問題だ

けど、何か作ったとして、もしそれを鼻先で笑われたら　　うわ、想像だけでもキツイ。絶対にしばらく再起不能になっちゃうよ。

《あ、でもその代わり　　》

暗く落ち込んだあたしとは対照的に、やっぱり明るいゲストの声。その言葉はそのままあたしの耳から通り抜けかけて　　途中で方向転換してあたしの頭を直撃した。

「…それだっ！！」

思わず声に出してしまうほど。

それはまるで天からのお告げみたいだった。何だ、そういうのもいいんだ。それならあたしも出来る！

…そう思っただけ。

そのゲストの発言に対するリアクションは先程と変わらないもので、あたしは少し悩まねばならなかった。

今の冗談だったの？　それとも、本当にアリ？

でも…『ええっ！？』って反応じゃなかったから、特別変な事でもないんだよ、ね……？

どちらにしてもあと数時間もしたらハザマは帰ってくる。他にこれといった選択肢もないし。

こうなったら、実行あるのみ！！

あたしは決心すると、早速準備に取り掛かった。

White Honey (後篇)

午後18時半、ちよつと過ぎ。

今日は残業とかがなかったみたい(あつたらちゃんとハザマは連絡をくれる)。いつも通りの時間にハザマが帰って来た。

ガチャリ、と鍵を開ける音がすると同時に、あたしは玄関に向かって走る。

「ハザマ、お帰りっ!!」

出迎える事自体は珍しい事じゃないものの、ハザマは普段滅多に見せる事のない面食らったような顔であたしを見た。

…そして、一言。

「何事だ？」

『ただいま』を忘れての、この台詞。本気で驚いたみたい。

あたしは気をよくして、全開の笑顔のまま、帰って来たままの状態で立ち尽くすハザマに飛びつく。

「!？」

反射的に受け止めながら、それでもハザマは状況が掴めない顔。

今のあたしは人の姿。そうすると猫の時とは違って、ハザマにぎゅつと抱きつく事が出来る。

…人の腕って、便利だなって思う瞬間。

「…ケイト？」

「大好き、ハザマ」

いつも言っているけど、今日はちよつと違う。

そのまま背伸びして、朝のおはようのキスみたいに頬にキスする。するとハザマはこちらがびっくりするくらい硬直した。

「…ケイト、一体どうした……？」

どうしたっ、て……。

何でそんなに驚くの？　すごく困惑した顔…もしかして嫌だった、とか？

そう思った途端、胸の奥が苦しくなった。思わず俯いた視界の端に、ひらひらの服の裾が見える。

《その代わり、めちやくちや着飾って『わたしがチョコの代わりよ』とか言って迫るかも!》

さっきテレビのゲストが言っていた言葉が甦る。よみがえそれなら出来るって、思ったんだけどな。

ハザマが買ってくれた、ひらひらのワンピース。ここに来て一年目、やっと人の姿を自分の意志で取れるようになった頃に、プレゼントしてくれた思い出の服。

淡いピンクであたしのお気に入り。汚したくないから、今まで数えるくらいしか着てなかった。

…あたしはあげられる物は何にも持っていないし。

でも、ハザマの為になら、多分この命を捨てられると思うの。

そういう気持ちを込めたんだけど、ハザマには伝わらなかったんだろうか……。

「ケイト……?」

「う」

駄目だ、涙が出そうだよ。

泣いちゃ駄目だってば、ハザマがもつと困るよ。…そう自分に言い聞かせたけど、無駄だった。

零れ落ちた一粒を切っ掛けに、両目から涙が溢れてくる。くっついた身体越しに、ハザマがぎょっとしたのが伝わってきて、益々悲しくなる。

「何で泣く?」

「…え、う…だって……」

説明しようと思うけれど、うまく言葉にならない。

咽喉の奥で言葉が詰まってる。形にならなくて、溶けて混じり合っ
って、胸を焼く。

「…ケイト……」

心底困ったようなハザマの声。…困らせたくないのに、
やがてハザマの大きな手が、宥めるように頭を撫でた。指先から
伝わる困惑は益々あたしを悲しくさせたけど、それでも涙は少しず
つ引いてゆく。

…それからどれ位そうしていただろう。

ようやく涙が止まってくれて、おずおずと顔を上げると、ハザマ
はやっぱり少し困った顔であたしを見下ろしてた。目が合うと少し
だけ微笑む口元。

「ようやく泣き止んだか」

「…ごめ…ハザマ……」

声を殺して泣いたせい、声が少し枯れていた。

ひりひりする咽喉に少し顔をしかめると、ハザマはあたしをそっ
と引き離して苦笑の滲んだ声で言った。

「…夕食に、するか？」

+ + +

その後、ハザマの作った晩御飯を食べながら（ちなみにメニュー
はあたしの好きなオムレツだった）、あたしはぼつりぼつりと事の
経緯を話した。

バレンタインデーというものを知って、あたしも何かしたくなっ
たこと。

何か作ろうかと思ったけれど、諦めたこと。

そうしたらテレビで司会者とゲストが興味深い会話をしている、
それなら自分もできると思ったこと。

途中でハザマは笑うんじゃないかと思ったけれど、ハザマは笑わ
なかった。

ただ途中、あたしがゲストの『わたしがチョコの代わりよ』と
いう発言を口にした瞬間、何だか頭痛でもするかのようにこめかみ

を押さえたけど。

「…そういう事だったのか」

話し終わると、ようやく納得したという顔でハザマがため息をついた。

「いきなり抱きつかれた上に、泣き出されて…何があったかと思っただぞ、俺は」

「…ごめん…なさい……」

確かに言われてみれば訳がわからない行動かも。

しかもハザマは、今日がバレンタインデーだという事もわかっていなかったみたい。

自分には無関係な事だと思っていたからな、とハザマは言った。

本当かなあ……。あたしはハザマの職場の事をよく知らないけど、そこには一人か二人は女の人もいるんじゃないの？

…そう思っただけで、結局口には出来ずにあたしは別の事を口にした。

「えとね、ハザマ。嫌だった……？」

「…何が」

「抱きついて、キスしたこと」

その瞬間のハザマの表情は、あたしが見た事のないものだった。

目元と耳が、赤く染まってる。もしかして、照れてる！？

逆にその反応に驚いて目を丸くするあたしに、ハザマはちよつと不機嫌そうな口調で口を開いた。

「…何でそう思うんだ？」

「え、だって…固まったから」

だって、特別な事はしてないよ。

頬にキスなんて、毎朝してるし。

猫の時だけ。

「それは……」

ハザマの目が少し泳ぐ。

うわー、こういう困り方してるハザマって初めて見るよ？

何だろう…　　すごく面白い……！

「ねえ、どうして？」

愉快的気持ちになって、調子に乗って追求すると、ハザマは照れたような顔のまま、いつもの口調で言い放った。

「いきなり説明もなしに泣くような子供に答える義務はない」

「…何それ！？　ちゃんと答えてよ！！」

「うるさい。…ほら、零してる。ちゃんと手元を見て食べ」

そのままハザマは自分の食器を手に流しの方へ行ってしまう。はぐらかされたあたしは置いてけぼり。でも何だか腹は立たなかった。

ちゃんと答えなかったって事は、嫌だとは思ってないって事だよね？　ハザマの性格なら、嫌だったらはっきり言うはずだもん。

そう思うと勇気が沸いてきた。今はまだ子供扱いだけど、今に見てろ！

絶対にいい女になって、ハザマに自分から好きだって言わせてみせるんだからね！！

そんな事を思いながらフォークを片手に闘志を燃やすあたしを、流し場からハザマが見ている事にあたしは気付かなかった。

（…頼むから、もうちょっと大人になつてくれ……）

そんな風に、ハザマが心の中で祈っている事にも。

…そんなハザマの本心をあたしが知るのは、それからもう少し後のこと。

White Honey（後篇）（後書き）

HPのTOP画にケイトを描いた際にバレンタインデーだし、たまには甘い話でも書こうかなと思って書いた話です。

わたしは「ばかつぷる」を書くのは好きですが、「乙女の気持ち（笑）」を書くのは非常に非常にひっじょうに苦手にしておりまして…自分で書いたし、書いた記憶もあるんですが…後に読み返して自分で書いたのが信じられないくらい、甘くてびっくりした覚えがあります……。

人間、やればできるものなのですね。

正に「ケイト降臨」って感じです。

確か予定ではもうちょい短くてほのぼの系になるはずだったのに…文章全体からハートが乱れ飛んでいるかのよう（汗）

S p i c y B l a c k (1) (前 書 き)

バレンタイン／ホワイトデーイベント作品（ハザマver.）

Spicy Black (1)

俺の名は、ハザマ。

実際には姓でもなく名でもない、単なる呼び名なのだが、俺の知り合いは皆こう呼んでいる。

というのも、俺には正しい意味での名前がないからだ。

いや…多分、本当はあったのだと思う。親がつけてくれたであろう、名前が。

けれど、俺はそれを覚えていない。

現在では俺の職場の上司に当たる人が俺を拾った時、俺は名前だけでなくそれ以外の自分の事を全て忘れてしまっていた。

そこで便宜上付けられた名が、『ハザマ』。

その名には、『人』と『獣』の間にある者、という意味が込められている。

+ + +

「…ハザマさん？ どうしました、浮かないお顔で」

突然、耳元で聞き覚えのある声。その至近距離からの声で、俺ははっと我に返った。

どうやらすっかり考えに没頭していたらしい。

「あらまあ、驚いた。あなたでもそんな風に考え込む事があるんですね」

声の主は俺の反応に目を丸くしたが、すぐに聞き方によっては失礼極まりない言葉を言いながら、ころころと笑いに笑った。

その顔を、俺はきつと苦々しさを隠せない顔で見ていたに違いない。

よりもよって、一番油断のならない人物の前で隙を見せてしまふとは……。

「何か用ですか、あかねさん」

無意識に警戒が声に出て、言葉が硬くなる。

これでも出来るだけ平静を保っているつもりなのだが、おそらく相手にはこっちの動揺などお見通しだろう。

彼女　佐竹あかねという　は目を惹く大きな瞳をこれ以上ない程愉快そうに細めて、まだ笑いの発作の治まらない口元を、白い着物の袖で隠した。

「ごめんなさい、笑ったりして。あなたも半分とはいえ人ですものね。うつかりするような事があっても当然でした」

見た目が十二、三歳程であるせいで、につこりと笑うその顔はまったく悪意のない無垢なもののように見える。

腰までもある長い黒髪。常に身に着けているのは、白を基調にした淡い色合いの振袖だ。

丁寧な口調と相まって、何処の旧家のお嬢様かと思える様子だが、見た目で騙されると痛い目に合う事を俺は嫌と言うほど熟知していた。

…そうでなければ、俺がわざわざ自分より明らかに年下の子供に敬語なんぞを使うものか。

「…それで、用件は」

「そんなに怖い顔しなくても。…つれない方ね。用がなければ、声をかけてもなりませんか？」

軽く小首を傾げての言葉に、出来る事ならそうしてくれ、という言葉が咽喉元まで出かかった。

だが、そんなことを口にした日には、どんな恐ろしい報復が待ち構えているかわからない。

俺は心の奥でげんなりしながらも、努めてそれを表に出さないように、最大限に穏やかな口調で返事を返した。

「そんな事はありません。…ですが、あかねさんが用もなく俺の所に来る事なんてないでしょう？」

「まあ！それは誤解です、ハザマさん。ハザマさんはわたくしに

とつて、大切なお仲間の一人。種族こそ違えども、親愛の情に違いはございませんよ?」

いけしゃあしゃあと言い放つと、あかねさんは少し悲しげな顔をしてみせた。

…おそらく、これが初対面だったなら、俺もきつと騙されていた事だろう。

だが、あいにくと不本意ながらも付き合いの長い俺の目には、その笑顔の裏で悪魔が微笑んでいる事を見抜いていた。

「で…、本当に何しに来たんです」

芝居めいたやり取りに付き合う趣味はない。

そんな意図をこめてもう一度尋ねると、あかねさんはやれやれと言わんばかりにその肩を竦めた。

「もう、本当につれないんですから。…昔はあんなに可愛らしかったのに……」

むくれた顔でぼそりと付け加えられた言葉に、ぞくりと背中を悪寒が走った。

これは彼女お得意の『昔の弱み』攻撃が始まるかと反射的に身構えたが、あかねさんはそんな俺の懸念を無視して、いきなりその白い手をずい、と前に突き出した。

「？」

掌は上を向いている。まるで、何かを求めるような手つきだ。

だが、軽く記憶を思い返してみても、彼女から託された書類や仕事も、誰かから彼女に渡すように頼まれた物を受け取った記憶もない。

訳が分からずその手を凝視し、あかねさんからの説明を待ったものの、あかねさんはあかねさんで期待に満ちた目で俺を見ている。

何なんだ、一体。俺は仕方なく尋ねる事にした。

「…あかねさん、この手は一体？」

「一体って…見てわかりませんか？」

「わからないから聞いているんですが」

「何て事でしよう…！」

俺は心の底から困惑していたのだが、あかねさんも信じられないといった顔をする。

しかも顔ばかりでなく、差し出されていない側の手の甲を口元に運び、その衝撃の大きさを演出してみせた。

…今までを思い返すに、彼女がここまでオーバーリアクションをする時は、決まって俺の理解の範疇はんちゆうを超える理由が存在する。

しかして、あかねさんはやはり俺が予想もしていない言葉を口にしたのだった。

「ハザマさん？ あなた、今日が何の日か知らないのですか？」

何処となく非難めいた口調と視線に、俺の困惑は更に深まる。

何の日かと問われて、もう一度記憶を浚さいつてみたが、今日は祝日も祭日でもないし（そうならそもそも出勤なぞしていない）、誰かの誕生日でもない。

眉間に皺を寄せて真剣に考え込む俺に、あかねさんは心底呆れた目を向け、差し出していた手を引っ込めたかと思うと、両手を腰に当てた『説教ポーズ』を取った。

「いいですか、ハザマさん。その耳をかつぽじつてよくお聞きなさい。今日は…『ホワイトデー』です。バレンタインデーのお返しをする日でしょう！ この日を忘れるなんて、殿方としてあるまじき事ですよ？」

…」

細い眉を吊り上げての『お説教』に、俺は心の底から首を傾げた。今日が三月十四日で、世間一般で『ホワイトデー』だと呼ばれている事は知っている。

…と言うか、俺がこの人の接近に気付かない程に思い悩んでいたのも、実はその事に大いに関係するのだ。

だが、しかし。

先程の手の意味する所をようやく理解はしたが、やはりわからない。

「…あの、あかねさん。俺はあなたから先月の十四日に、何か貰ったような記憶がないんですが？」

そう…今を遡ること、一ヶ月前。

バレンタインデーと呼ばれる日、丁度俺は上司と仕事に出ていて…そこからこの職場に戻ってきた時にあかねさんと言葉を交わしはしたが、その時に何かを渡されたりはしなかった。

これは断言出来る。

何故ならその日…うちに帰るまでは、そんな日だという事に俺はまったく気付いていなくて、その結果、帰宅した時に今までになく驚かされる羽目になったのだから……。

お陰でその日に関係する記憶は、常以上に鮮明だ。

その時の事を回想して思わずため息をつきかけた俺を、あかねさんはあからさまにシヨックを受けた顔でひどいわ、と詰^なった。

「ひどい、ハザマさん。そんな冷たい方だなんて思いませんでした

……！」

「え？ あの……？」

「ハザマさん、甘いもの苦手でしょう？ ですから…ですから、わたくし……」

あ、と思った時には、その大きな目は涙で潤み始めていて。

「ゆ、^い勇者^{ゆう}さんに、言いつけますからあ……っ！」

そんな捨て台詞を投げつけて、こちらの言い分など耳を貸さない勢いであかねさんは去って行った。

Spicy Black (2)

「おい、ハザマ。ちよつといいかい？」

あかねさんが嵐のように去った後、しばらくして扉を軽くノックする音がしたかと思うと、廊下からそんなのんびりとした声がした。声を聞くまでもなく、その人の来訪があるだろうと予想していた俺は、うんざりとした気持ちで返事をした。

「…どうぞ」

答えると、廊下から長身の男が勝手知ったる様子で入ってくる。

見た所、二十代中頃。均整の取れた身体をスーツで包んだその姿は、何処からどうみても完璧な社会人といった雰囲気だ。

ちなみに、一応、俺にとっては上司に当たる人だ。

俺もそれなりに身長があるが、この人は更にそれよりも高い位置に頭がある。その高い場所から見つめてくる目は穏やかで優しい。実際、海千山千の人々が集うこの職場で、名実共に『癒し系』の名を欲しいままにしている人物である。

気さく、という言葉をもそのまま体現したようなその人は、部屋に入ってくるなり笑顔で言い放ってくれた。

「やーい、泣かせんぼ」 駄目だろ、子供と年寄りには優しくしないと」

揶揄^{やゆ}するような言葉ながらも、そこにあるのはあくまでも親愛の響き。

「…そんな事を言われても……」

多分、俺は苦虫を噛み潰したような顔をしていたに違いない。悔しい事だが、二重の意味で事実なので否定出来なかった。

そんな俺の顔を面白^{おもむろ}そうに見つめて、その人 名前を鳴海勇人^{なるみゆ}という

は徐^{おもむろ}にその大きな手を俺の方へと伸ばしたと思うと、避ける暇も与えず、いきなり俺の頭をがしと乱暴に撫で始めた。「ちよ、ちよつと…いきなり何するんだ、あんたはっ!？」

「いやあ…お前も大きくなったなーって思ってた？」

「何を寝ぼけた事を…っ！」

見た目と中身の年齢が一致しないのは、この職場ではありふれた事だ（一般的ではない認識はある）。

だが、だからと言って一見した所そう年齢の変わらない男に頭を撫でられるなぞ、他には絶対に見られたくない姿だ。

乱暴に振りほどこうとするが、その手はそう簡単には解けない。

… この怪力持ちが…っ！！

「離せ…ッ！」

「はいはい、わかったよ」

押し殺した声に殺気を込めると、ようやく解放される。

…なんでそんなに残念そうな顔をされなくちゃならないんだ…。

ため息をつきながら乱された髪を適当に整えていると、鳴海さん

（一応、上司だから『さん』付けだ）はその辺の空いた椅子に腰掛け、こちらもため息混じりで呟いた。

「ちえ。お前、猫ツ毛だから触り心地いいのに…。」

「…（怒）」

……（怒）。

「それよりさ、さつきあかねさんが涙ながらに俺の所に来ただけ

ど、一体何があったんだ？」

ようやくこの部屋に来た理由について触れたかと思えば、鳴海さ

ん自身はその経緯を知らないような事を口にする。

「…聞かなかったのか？」

「いや、聞いたんだけど…『こんな悲しい事、口にするのも辛い』

とか言っただけでくれなかつたんだよなあ」

「…あの人は…。」

頭痛がする。何があったのか、聞きたいのはこっちの方だ。

だが、この問題が解決しなければ、鳴海さんも退散してくれない

だろうし…。

仕方なく、俺は鳴海さんに事と次第を話した。

「…ふうん。そういう事か」

話を聞き終えた鳴海さんは、納得したように頷いた。

「本当に俺はあの人に何か貰った覚えはないんだ。だからお返しとか言われても……」

『お返し』するのは別に構わない。だが、あかねさんも理由を思いつけずに渡されても多分受け取ってはくれないだろう。

しかし 本当に覚えてないのだ。あかねさんはバレンタインデーの時に一体俺に何をくれたというんだろう。

心底弱り果てていると、俺の話をしばらく考えていた鳴海さんが口を開いた。

「あのだ、ハザマ。あの人に一般常識を求めるのは、無理だと思うよ？」

「……？」

「ほら、あの人って見かけは小学生だけど、中身は『明治生まれ』だろ。しかも超箱入りだし、当然バレンタインデーなんてイベントは元より、その後にこじつけみたいに出来たホワイトデーの意味とか知る訳がないじゃないか」

何を恐れてか、幾分声を抑えたその言葉は、俺をひどく納得させた。

そう言えばそういう人だった、と。

あかねさんは以前クリスマススの時、誰かが言ったキリストの誕生日だという説明のみを鵜呑みにして、クリスマスだというのにバースデーケーキを買って来させた人だ。

そんな前科がある人が、バレンタインデーやらホワイトデーを曲解していいなどとして言えようか。

……その辺りの変な素直さは、どっかの誰かを彷彿とさせて、余計に俺を鬱にした。

「ちなみに鳴海さんにはあの人……」

「ん？ 俺は何も貰ってないよ」

念の為に確認すると、あっさりと鳴海さんは答える。

これで鳴海さんにもお返しを取りに行っていたのなら、まだ理解

出来るのに。

「……何でだ……？ あの日、俺と鳴海さんは一緒に帰って来たのに……」

やっぱりあの人は俺にとって、世界で一番不可解な人かもしれない……。

そんな事を考えていると、鳴海さんは簡単に言い放ってくれた。

「そりゃ決まってるだろ。俺には薫さんという、最愛の奥さんがいるからさ」

「……は？」

「だから。明治生まれのあの人には、妻帯者に恋愛の意味で物を贈るなんて『はしたない』事じゃないのか？」

「……そういう理由なのか……？」

……確かに、あかねさんと親しい人間の中で、独身の男は俺くらいなのかもしれないが……。

それが何であれ、恋愛の意味は確実にないと思う。何しろあのあかねさんだ。

「取り合えず……まず謝って、理由を聞いたら？」

考え込んだ俺に、鳴海さんが苦笑を浮かべつつそんなアドバイスをくれる。

「身に覚えがないのにか……？」

「……そんなに心底嫌そうな顔しなくても……。でもあかねさんの場合、自分は悪くないと思っている時は、絶対に自分からは折れないじゃないか。この際、自分のプライドは棚に上げて……な？」

+ + +

結局、このまま居心地の悪い思いをするのも嫌で、俺は鳴海さんの言葉に従い、あかねさんの部屋に向かった。

……すごく、理不尽な気がしてならないんだが、これって被害妄想だろうか……。

軽くドアをノックすると、扉の向こうから返事は返って来なかった。

でも部屋の中から気配がする。これは怒ってお籠りに入ってしまったか。

…ああ、もう、本当に面倒だ。

俺は出来る事なら、波風立てず、静かに生きて行きたいんだ。なのにどうして、俺の身の回りにいるのは俺を振り回す奴ばかりなんだ……？

あかねさんといい、鳴海さんといい　　…ケイトといい。

思い出して、思わずため息をつく。そうだ…問題はあかねさんだけではなかったのだ。

ここは早い所、こちらの片を付けてしまおう。

俺は心を決めると、もう一度ノックを繰り返し、扉越しに中にいるあかねさんに声をかけた。

「…あかねさん。そこにいるんでしょう？」

「……」

「さっきは済みません。…でも本当にわからないんです。こんな事を聞くと、益々失礼になるのかもしれませんが…一体、バレンタインデーの日に、俺に何をくれたんですか？」

返事はやはり返って来なかった。

それでも辛抱強くドアの外で待つ事、数分。

中で人が動く気配がしたかと思うと、カチャリと小さな音と共に扉が開いた。

「…あかねさん」

「本当に、不器用なんですから。尋ねるにしても、もう少し言い様つてものがあるでしょう？」

怒った口調でそんな事を言いながら、ようやく顔を見せたあかねさんは、こちらがもう一度謝罪する前に、そのまま説教モードに突入してしまった。

両手を腰に当てて、自分より遥か上にある俺の目を睨むように見

つめて。

「良いですか、ハザマさん。殿方がそう簡単に謝るものではありません！ 黙して語らず、どんと構えてらっしゃい」

「しかし……」

「しかし、じゃありません！ ……今回はわたくしにも非がありました。こちらこそごめんなさい。ハザマさんがちよつとした心遣いに気付くような人でない事を知っていたにも関わらず、自分の気持ちだけを押し付けてしまいました」

「…謝ってくれるのは助かるが、素直に喜べないのは何故だろう…
…？」

「取り合えず、中にどうぞ。こんな所で立ち話もなんですから」

すつきりしない気持ちのまま、勧めに従って俺はあかねさんの部屋に足を踏み入れた。

Spicy Black (3)

あかねさんに与えられた部屋は、俺の部屋と造りは同じはずなのに、機能的な中にもあちらこちらに置かれた花瓶や絵などのせいか、何処か生活感がある。

…そう言えば、この部屋に入ったのは随分と久し振りだ。

「…さて、問題の十四日の事ですけど」

俺が椅子に腰を下ろすのを確認して、あかねさんは徐に核心おもむきに触れた。

「ハザマさん、甘いものが苦手でしょう？」

「…ええ」

「二月十四日は殿方にチョココレートを贈るのが普通だと教えて頂いたですけど、チョココレートって甘いでしょう。だからそれを貴方にあげるのは可哀想かしらと思って。…今思うと、それが間違いだったようですね」

そこまで言うのと、あかねさんは疲れたようにふう、とため息をついた。

「あの日、ハザマさんは勇人さんと外でお仕事だったでしょう？
すごく冷え込んでいて、寒いだろうと思いましたが…あの日、わたくしは……」

「…！もしかして……」

そこまで聞いて思い出す。

あの日 二月の丁度中頃に当たる日は、よりにもよって朝から雪混じりの天気だった。

午後には雪も止んで晴れ間が見えたものの、基本的に寒さに弱い俺は、内心仕事に出るのが辛かった。

その出掛けに、ふと机の上を見ると置いてあったのだ。 自分では買った覚えのない、使い捨てカイロが。

そしてその横にメモがあつて、『寒いからこれを持って行くよう

に』という言葉が書き添えられていた。

…実はこういう事は過去に何度もあつて。

しかも時によつて、持つて来る人間があかねさんだったり、鳴海さんだったり…物によつては、面識のある鳴海さんの奥さんからだったりした。

だから全く思いもしなかったのだ。それがあかねさんからの物でまさかバレンタインデーにちなんだ物だとは。

「あれ、だったんですか……」

「そう。…やっぱり気付いてなかったんですね？」

「済みません」

今度は心から謝る。

するとあかねさんはその顔にようやくいつもの笑顔を浮かべてくれた。

「いいんですよ。あの時のメモに、自分の名前を書かなかった事もいけなかったんです。筆跡でわかるだろうと思つていたのですけど、よく考えたらハザマさんがそこまで考える訳がないですもの」

「……」

…気のせいだろうか。

さりげなく、言葉に毒が入っているような気がするのとは。

「真面目で堅物で、不器用な上に口下手。…そんな風にあなたが育つてしまったのには、わたくしにも責任の一端がありますしね」

「……あかねさん」

やはり嫌味が入っていたか。

思わず呼びかけた声に陰が混じる。するとあかねさんはちらりとこちらへ視線を投げつけ、不敵に微笑んだ。

…嫌な予感がしたが、今回は逃げ場がない。

そして悪魔は楽しげに囁いた。

「それでね、ハザマさん。もうお返しなんて求めませんから、わたくしをお願いを一つ、聞いてくださる？」

+ + +

重い足取りで自室に戻ると、まだそこに鳴海さんがいた。

「お疲れ。どうだった？」

気軽に聞いてくれる。

俺が精神的にどれ程消耗したか、見てわかるだろうに。

「…取り合えず、お怒りは解けた」

「おお、そりゃ良かったじゃないか。…でも、その割りに浮かない顔だけど？ 何かあった？」

鳴海さんの質問に、俺は何と答えたものか悩んだ。

俺の経験から言って、あかねさんから提示された『お願い』はおそらく、この鳴海さんも焚きつけるに違いない。

下手に口にすれば、益々泥沼になる気がする。

だが…こういう時に相談出来る相手が、鳴海さんくらいしかいない事も確かだった。

「…『お願い』された」

「…うわ、それはまた……」

今までのあかねさんの『お願い』がどういうものか知っている鳴海さんは、同情するような顔になった。

「今回は何？」

「…それが、その……」

「ん？」

この期に及んで俺は迷った。

やっぱり言わない方がいいんじゃないか？

何しろ、前回の『お願い』である

「一日、『お母様』って呼んで」

…の時は、この人まで調子に乗って『じゃあ、俺も「兄さん」で！』とか言ってきたくらいだからな。

そんな風に悩んでいると、鳴海さんは余程言いたくない事だと思
ったのだろう（実際、言いたくなかった）、やれやれと肩を竦める
と氣遣うように言ってくれた。

「わかった。じゃあ、俺からあかねさんに、今回の『お願い』を撤
回してもらおうように頼んでやるよ」

「…！？」

「いくらお前が可愛いからって、あの人もいろいろ無茶言うからな
あ……」

などと言いながら、早くも扉に向かいかけている長身を、俺は慌
てて呼び止めた。

「な、鳴海さん！ ちょっと待て！！」

「ん？」

冗談じゃない。

確かにあのあかねさんも、この職場では比較的常識人の鳴海さん
の言う事は素直に聞いてくれる方だ。

だが、そんな事を頼んだらあかねさん自身から今回の『お願い』
が何なのか、直接この人にばらされるじゃないか……！

そうなれば、火に油どころではない。被害を最小限に留める為に
も自分で話した方がマシだ！

「わかった、話す。実は……」

ああ、もう本当に…どうしてこう、面倒な事ばかり降りかかって
くるんだ……！

「会わせろ、って」

「…？ 誰に」

「… うちの、居候」

…実際には、あかねさんが言ったお願いの内容はこうだ。

『ハザマさん、わたくし、そろそろハザマさんの未来のお嫁さん…
ケイトさんとお会いしたいわ。…連れて来て下さる？』

よりもよって、そう来るとは。

いろいろと突っ込みどころ満載の発言ではあるが、いつかこういう『お願い』が来るのではないかと心ひそかに思っていた。

以前から、あかねさんはケイトに会いたいと事ある毎に言っていたのだ。だが、まだケイトが長い時間人の姿を保てない理由から、無理を言う事はなかった。

…が。

先日、ケイトを連れて街へ出た時、その姿をこの職場の関係者が目撃したらしく、その話を聞いたあかねさんは『じゃあ、ここに連れてきて大丈夫じゃないの』と思っただけらしい。

「居候って…噂のケイトちゃん？」

「…ああ」

「…ふーん……」

…ああ、なんか嫌な予感がする。

しかして、その予感は外れず、鳴海さんは喜色満面の笑顔で言うてくれた。

「それはいいじゃないか！ 俺も一度会ってみたかったし。連れて来るだけでいいのなら、『お願い』としては軽い方じゃないかな？ 連れておいでよ。そうだ、その時は俺も薫さん呼んでいい？ やっぱり、ハザマの『彼女』には薫さんも会いただろうしさ

！」

「…っ」

やっぱりか……！

人を何だと思っているんだ、この人達は！ 見世物じゃないぞ！？

…だが、あかねさんだけならともかく、鳴海さんまでもこう言い出したなら、事態が変わる事はまずあり得ない。

逆らって『お願い』を反故にしようものなら…それを盾に取って、うちに押しかけてくるな、確実に……。

あのあかねさんとケイトという組み合わせだけでも、俺にとっては頭の痛い話なのに、これに鳴海さんと奥さんの薫さんまでも加わ

った日には…いや、ここに連れて来るとそれ以上に。
ああ、想像するだけで眩暈がする。

…結局その日、許容範囲を超えた俺はそのまま逃げるように自宅
へと帰った。

Spicy Black (4)

「お帰りつ、ハザマ」

ドアを開けると同時に、飛びついてくる小さな白い物体。

反射的に受け止めるとそれはそのまま俺の胸にしがみ付いた。

「…ただいま」

「どうしたの？ 今日はいつともより早いね」

金色の瞳を輝かせて、猫の姿の俺の同居人

ケイトはそんな

事を探ねる。

正直に話すには、まだ心の整理がついていなかった俺は、ただ苦笑を浮かべる事で返事に代えた。

…ああ、やっぱりうちは落ち着く。

あの高いテンションの中にとくと、正直言つて、かなり気疲れする。

余計な事を話したり、気を使ったりしないで済むだけで、気持ちには和むものなのだと、再認識させられる瞬間だ。

…本当はわかってる。

あかねさんも、鳴海さんも、心から俺に対して親愛の情を持っていて、だからこそ必要以上に構ってくるのだという事を。

何もわからず、言葉も忘れてボロボロだった俺を拾ったのは鳴海さんだし、そんな俺の世話を焼き、一人で仕事が出来るようになるまで育ててくれたのは、あかねさんだ。

独立して一人暮らしを始めるにあたって、料理やらを仕込んでくれたのは鳴海さんの奥さんである薫さんで 彼等がいなかったら、今の俺がない事も重々承知している。

でも、時折思わずにはいられない。

…そろそろ、いい加減に『子離れ』してくれないか、と。

しみじみ思いながら、抱えたケイトを見下ろし

今更ながら、

俺は思い出した。

「…しまった……」

「ん？ どしたの、ハザマ？」

「い、いや、なんでもない……」

不思議そうに見上げるケイトを誤魔化して、俺はどうしたものかと考える。

あかねさんの事でうっかり忘れていたが、そもそも、俺が悩んでいたのはこいつの事だった。

…先月、件のバレンタインデーのお返しをどうしたらいいのか、それを悩んでいたのだ。

何しろ、あかねさん以上にとんでもない方法で、ケイトはチョコ以外のものをくれたのだから。

それは、言葉と行動。

…もつとも、ケイトの事だから、ホワイトデーという日が存在する事もわかってない可能性も高い。

だからそんなに思い悩む必要など、ないのかもしれないのだが
これも性格なのだろう、貰った以上はちゃんと返さねばと思ってしまうのは。

結局、何も思いつかないままに家に帰ってきてしまったが…さて、どうしたものだろう。

悩みながら、ケイトを床に下ろし、荷物を居間の椅子に置く。

毎日の習慣で、そのまま台所に向かおうとして じっと見つめてくる視線に気付いた。

「…ハザマ、お仕事で何かあったの……？」

俺の足元で、心配そうな声。

見れば、ケイトが不安そうな目で俺を見上げていた。

「疲れてる？ だったらご飯、作らなくてもいいよ。えと…そうだし、代わりにあたしが作るよ！」

「…お前、まだ飯も炊けないんじゃないかったか？」

まるで名案とばかりに提案するケイトに、俺はつい普段どおりに受け答えてしまう。

するとたちまち、ケイトはしゅん、と頂垂れた。

「…ごめんね、ハザマ…力になれなくて……」

そのあからさまに落ち込む様子に、俺は慌てた。

確かに今日の俺は疲れている。けれど、それはケイトにはまったく関係のない事だ。

それに…ケイトが食事を作れないのは、今までケイトに任せようとか全く考えていなかった俺にも責任がある。

危なっかしくて、つい手を出し　そして、結果的には全部俺がやってしまう。

『要は慣れよ。失敗するのは初心者なら当たり前。最初から完璧にしようと考えないこと、わかった？　最後まで作り上げること、それが大事。一つの事を完遂させたら、自信が持てるでしょ？　自信は次の意欲に繋がるからね。…そうして繰り返し続ける内に、何事も上達するのよ』

…俺が薫さんに料理を習った時に最初に言われたのが、この言葉だった。

結局、俺もあかねさんや鳴海さんと変わらないのだと思う。

いつまで経っても、ケイトを何も出来ない子供扱いをして。…で

も、ケイトが何も出来ないのはそうさせない俺がいるからだ。

「ケイト」

「…何？」

「料理、覚えたいか？」

「…　うん！」

途端に明るくなる表情。

…同時に自分の心が軽くなるのを自覚して、俺は覚悟を決めた。

「じゃあ、今度の休みに…俺の料理の師匠に会いに行くか」

「え。師匠って…ハザマの先生ってこと？」

「ああ。…あと、他に二人くらい、お前に会いたって言っている

人もいるんだが……」

+ + +

そうしてケイトと二人、あかねさんの『お願い』を叶えるべく、出かけたのは次の日曜日。

折角の休日だからと、集まったのは繁華街だった。職場に連れて行かずに済んで、心底ほっとしたのは言うまでもない。

…おそらく、その辺りは鳴海さんが根回ししてくれたんだろうと思う。あかねさんが自分で言い出すとは思えないし。

最初こそ悪ノリしていたけれど、そうした配慮を忘れないから職場でも『難あり』の人に信頼されるんだろう。悔しいけれど、そういう部分は敵わないと常々思う。

俺以外の人間（正しい意味で『人間』と呼べるのは薫さんだけなのだが）と初めてまともに接したケイトは、最初こそ人見知りをしていたものの、やがて打ち解けて楽しそうだった。

…これが今の俺に返せる、バレンタインデーのお返し。

危険から遠ざけるように閉じ込める事は、もうやめる。庇護したい気持ちだけじゃ、ケイトの為にはならないから。

多分、これから何かある度に胃が痛くなるような思いをしたり、頭痛を覚えたりしないとならないんだろうけれども。

それでも、きっとこれは必要な事だと思う。俺にとっても、ケイトにとっても。

「ねえ、ハザマさん」

薫さんに似合う服選びに連れて行かれるケイトの後姿を何気なく見ていると、不意に横から声がかけられた。

「…何ですか、あかねさん」

何となく嫌な予感を感じつつ、声の主に目を向けると、ご満悦な表情のあかねさんが俺を見上げて立っていた。

流石に今日は着物姿ではない。普段の和装とは遠く離れた原色も

眩しいジャケットにスカート。

長い黒髪は二つに分けて三つ編みにし、更にやはり派手な模様の帽子を被っている。

ケイトをして『可愛い!』と言わしめた位だから、似合っているのだろう。

…普段の姿を見慣れている俺としては、何だか別人を前にしている気分だ。この場においては着物よりはるかに違和感がないはずなのだが。

そんな俺の感想など気付いた様子もなく、あかねさんは軽く小首を傾げて尋ねてくる。

「つかぬ事を聞いてもよろしいですか？」

「何でしょう」

するとあかねさんは、その笑みを例の『悪魔の微笑』に代えると楽しげに問うた。

「ケイトさんに、何処まで話しても良いのかしら？」

「……!?!」

言われた言葉の意味の重さに気付き、言葉を失くした俺を無視して、あかねさんは心底楽しそうに続ける。

「ハザマさんのご幼少の砌みぎりとか、きつとケイトさんも知りたいんじゃないかと思うんです。ですからほら、ここにアルバムも用意してきました」

と、背に背負った花柄のリュックサックを示す。

妙に重そうだから何を入れているかと思えば… って、ア、

アルバム……!?!

「な、なんでそんな物を、あかねさんが持っているんですか!?!」
「そりやもう、こっそり隠し撮りしたに決まってるでしょう? 何しろカメラを向けたら、ハザマさんったらずぐに表情が固まってしまうんですもの。自然体で撮れるように、わたくしと勇人さんはそりやあもう苦労したんですよ?」

いけしゃあしゃあとそんな事実を暴露して、あかねさんは反論も

出来ないくらいに動揺している俺に追い討ちをかける。

「ほら、夜中に怖い夢を見て泣いたりとか、勇人さんに海へ連れて行ってもらった時に溺れて、危うく死に掛けた事とか。…ふふ、思っ
い出しますねえ……」

「…っ！……！」

ふふふ、と含み笑うあかねさんをその場に残し、俺は駆け出した。
冗談じゃない。そんな事、ケイトに吹き込まれて堪るか……！

+ + +

刺激が強すぎる毎日。

慣れたと思うと、すぐに次から更に強い刺激がやって来る。

平穩に生きて行きたいと願う俺が、そこから解放されるのは果た
していつの事か。

…少なくとも、当分そんな日はやって来そうにない。

Spicy Black (4) (後書き)

バレンタイン企画でケイトの話を書いたので、じゃあホワイトデーにはハザマの話を書かねばなるまいか？ と思って書いた話です。もつとも、3月の頭くらいまでこんなの書く予定もありませんでした。

…が。

当時のWeb拍手用のイラストに、つい今まで設定はあったもののイラストには起こしていなかった『あかねさん』を描いてしまい、なんですか、すごく（外見だけですが）お子様にいたぶられ、翻弄されるハザマの図を書きたくなってしまったのです…！

書いててとても楽しかったのですが、愛情の差か、結果としてあかねさんが人気者になってしまったという……。

着物いいよ着物。和文化、バンザイです（コラ）

幸せの在り処（前書き）

『子猫のワルツ』の外伝、「Spicy Black」で登場した
鳴海夫妻の小話です。

幸せの在り処

「　　広いか狭いか、かな」

しばらく考え込んで、勇人ゆうじんはそんな風に答えた。
今日は日曜日。勇人もあたしも、仕事はお休み。

お天気が良くて、十二月にしては陽射しが柔らかくて暖かな日だった。小春日和ってこういうのを言うのかな。

うちでぼんやりしているのももったいない気がして、二人でちょっと離れた場所にある公園に向かって歩いている最中でのこと。

こうして一緒に出かける事は決して珍しくもなんともないのだけど、よくよく考えると不思議でもあった。

：隣を歩いている人が、この生涯を共にすると誓い合った夫
自分の伴侶だという事が。

あたし達は母親同士が親友で、しかも比較的近くに住んでいた為、
中学に上がる直前におばさん　　勇人の母親が亡くなるまではい
わゆる『幼馴染』という関係で。

血の繋がりはなかったけれど、あの頃のあたしは勇人を兄弟のよ
うに思っていたし、誰よりも多くの時間と記憶を共有する相手だった。

勇人が引越す事が決まった時は、泣きこそしなかったけど本当に
淋しい思いをしたし、大丈夫だろうかと心配もしたのだ。

何しろ、その頃の勇人は小さな頃から変わらない『弱虫泣
き虫』だったのだ。

：ひよっとすると、その頃の勇人はあたしにとっては『友達』で
すらなかったかもしれない。

物心ついた頃から、勇人はあたしの中では『庇ってあげないとな
らない存在』として位置付けられていた。

つまり、自分よりも立場が低いと思っていたのだ。今思うと、か

なり失礼な考え方だけれど。

それが『友達』 　同じ高さになったのは中学三年の時。

偶然再会した勇人は、たった三年ですっかり変わっていた。『薫ちゃんだよな?』と確認してきた人懷つこい笑顔はそのままだったけど。

同じ高校を志望している事を知って、また何となく同じ時間を過ごすようになったものの、合格発表の日の直前、勇人が突然失踪して。

：それからさらに時間が流れて：何の因果かまた再会を果たしたあたし達は、さらに関係が変わっている。

『友達』が『恋人』に、『恋人』から『夫婦』に。

恋人から夫婦への移行は、それまでの長さを考えると、信じられないくらい早かったけれど。

勇人の事を好ましく思う気持ちには、子供の頃から変わっていないはずなのに、関係を表す言葉が違っただけで、まったく別物みたい。

その境界線ってなんだろう?

何となく口にした疑問に対して返って来たのが、先程の言葉だった。

「それって範囲のこと?」

首を傾げて見上げると(口惜しい事に、身長差もかなり出来てしまった)、勇人は軽く頷いて肯定した。

「恋人って一対一の関係だから。友達は一対不特定多数：分子の方が大きい感じ、かな」

言われてみると確かにそういう気がしなくてもない。

以前から時々思っていたけど、こういう感性的なものは勇人には敵わない。少し感心していると、それに、と勇人は続けた。

「夫婦になると、替えがきかないしね」

「そーいう事は素面で言わない」

につこり笑って勇人がぎゅっと手を握って来るのを、すぱっと切り返す。

結婚したからと言って、そういう臆面もない言葉に免疫って出来ないものらしい。

愛情表現が素直に出来てしまう勇人と違って、あたしはどうしてもこう、照れが先に立ってしまふ。性格かもしれない。

…手を振り解かなかったただけでも、中世の人間が宇宙に進出して月面を歩く位の進歩だと思う。

「…薫さん、いい加減に慣れようよ？」

「うるさい。そっちこそ、いい加減に『さん』付けはやめなよね」

「うつ。……善処シマス」

普通に呼び捨てにすればいいのに、どうもそれが勇人には出来ないらしい。

『さん』付けされると、何だかあたしが勇人を尻に敷いているみたいじゃないの、と今まで散々文句をつけたのに、一向に改善される様子はない。

大体、『ちゃん』付けは嫌だと言われて、それが『さん』付けに変わるって変じゃなかるうか？

まあ、どちらか言うつと日常的な事に関しては何事もあたしがリードしている気がしないでもないけれど。…やっぱり、尻に敷いてる？

「それで、薫さんは何だと思う？ 三つを分ける境界線」

繋いだ手はそのままに勇人が尋ねる。そうだなあ、と考えるあたし。しばらく考えてみたけれど、これという答えは見つからなかった。

「わかんない。だって、『友達』だった人が『恋人』になって、終いには『夫婦』になっちゃったんだから。…途中で線引きなんて、出来ないよ」

言ってしまったから、まるでずっと今まで勇人一筋だと言っているようだと気付いて、内心ちよっと慌てたけれど、幸か不幸か勇人

はそこまで思わなかったようだ。

いつものように微笑んで、確かにそうだねと頷くだけで。

…でも、多分。

相手が勇人じゃなかったら、ここまで一直線なんて有り得なかったと思う。　なんて、もちろん照れ臭くて言えないので心の中だけで呟く。

まあ、その内。

酔った勢いにでも任せて、ちゃんと言うからね（素面ではとても言えません……）。

あたしをずっと好きでいてくれてありがとう。

今まで言いそびれてきてしまった、その一言を。

『友達』だった時も、『恋人』から『夫婦』になつてからも、いつもあたしは言われてから気付く事ばかりで。

それだけあたしにとって、勇人が近くにいる事が当然の事だった訳だけれども　　実際、勇人がいなかった頃の記憶はとても曖昧なものになつてしまっている。

我ながらなんて鈍感なんだろう。そして、よくもそんな鈍いあたしを、勇人は好きでい続けてくれたものだ。

よく晴れた日曜日。二人でちよつと離れた場所にある公園に向かって歩く。

それだけの事だけど、それがとても得がたいもののように思えるのは、きっと隣りにいる人が特別だからだ。

先程から繋がれたままの手に目を向けて、隣を見る。…うん、やっぱり自然だ。

あたしの隣は、勇人がいい。

「薰さん？　何？」

視線に気付いて、勇人が何事かと尋ねてくる。

「何でもない。見てただけ」

「…左様で」

肩透かしを食らったような顔。こういう他愛のないやり取りも嬉しい。

そうか、こういうのをきつと『幸せ』と言うんだ。

結婚式の時に知り合いとかに『幸せになれよー』とか『幸せにするよー』とか言われた時は、何だかピンと来なかったんだけど、それもそのはずだ。

だってあたしはその時にはもう、十分幸せだった訳だから。…勇人もそうだといいいんだけど。

聞いたら聞いたこつちが恥ずかしくなるくらい、臆面もなく笑顔全開で『幸せだ』って答える気がするの。ちよつと自惚れてるかなあ。

やがて目的の公園の入り口が見えてくる。公園の中から、小さな子供達の声。

うーん、平和だ。

これからもこんな風に、長閑に生きて行きたいものだ。小市民で結構、やっぱり世の中も、夫婦仲も平和が一番。

好きな人が隣にいて、家族や友達に囲まれて、好きな事を仕事にして。あたしは本当に幸せ者だ。

長い間、当たり前過ぎて気付かなかったけれど。

あたしの幸せは、ここにある。

幸せの在り処（後書き）

これは2004年のこっそりクリスマス＋年末企画（何処がこっそりなのかというと、変更点を更新履歴に載せてなかったから）でのランダムTOPに合わせて書いた小話です。

「Spicy Black」を書く以前から存在していた夫婦なのですが、この夫妻は私の中では、かなりの「ばかっぷる」に分類されています。

べたべたいちやつく訳ではないけれど（薫が照れ屋さんなので）、結局の所お互いしか見てないんで（笑）

今の時点では馴れ初め（何処から何処までにするかで長さが変わる…）の話を書く予定はないのでこちらに外伝として入れる事にしました。

よく考えたらわたしが書く夫婦は、奥さんを「さん」付けする旦那がよく出て来ます。何故だろう……。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6285m/>

子猫のワルツ

2010年10月8日13時47分発行